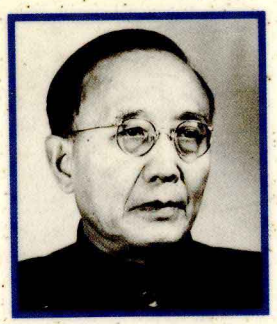


中国文化省次官
中華日本学会会長
劉德有

郭沫若 日本の旅

村山孚・訳

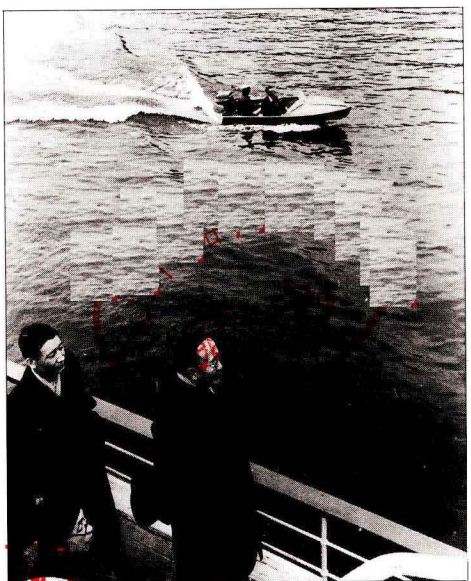
＊郭沫若氏は中国の優れた詩人・小説家・戯曲家であり、そして著名な歴史学者・考古学者・古文字学者であるとともに、政治家、社会活動家でもあった。＊郭氏は合わせて二十年間も日本で生活した。一九三七年、蘆溝橋事変が勃発すると密かに中国に戻り、抗日戦争に身を投じた。そして戦後の一九五五年十二月、氏は十八年ぶりに新中国の要人として、日本を訪れた……（著者）。

サイマル出版会

中国文化省次官
中華日本学会会長
劉德有 著
村山孚・訳

郭沫若・日本の旅

行記



Guo Moruo's Revisit to Japan

Chronicle of His Sojourn

by Liu Deyou

サイマル出版会

Liu Deyou

郭沫若・日本の旅

劉 徳 有 著

THE SIMUL PRESS, INC., Tokyo, Japan
無 断 転 載 を 禁 ず
原出版社／中国・遼寧人民出版社

（発行所） 株式会社 サイマル出版会

編集・発行人 田村勝夫
東京都港区赤坂1 8-10（〒107）
電話(03)3582-4221(代)／FAX(03)3582-4220
振替・東京4 52090番
印刷・製本 図書印刷株式会社

1992年10月 Printed in Japan ISBN4-377-40949-2

中日交流の里程標——日本の皆さんへ

郭沫若といえば日本人にもなじみの深い名前ではないかと思う。はじめは留学、そして次は亡命のため、郭氏は合わせて二十年間も日本で生活した。一九三七年、蘆溝橋事変が勃発すると、密かに中国に戻り、抗日戦争に身を投じた。そして戦後の一九五五年十二月、氏は十八年ぶりに新中国の要人の一人として、日本を訪れた。

この訪日は、当時、中日両国の国交がまだ回復されていない時期に多くの困難をのりこえて実現したもので、戦後の中日交流史に重要な一ページを記したのである。

あの訪日から四十年近い年月がたった。一九九二年は中日国交回復二十周年に当たる。この年の十一月十六日は郭沫若氏生誕百周年でもある。この機会に、戦後画期的だった郭沫若氏の訪日を回顧す

ることは、これからの中日関係を考え、それを正しく推進していくためにも意味のあることと思う。

さいわいにも当時、私は通訳として郭沫若氏をはじめとする中国科学代表団に随行して、日本を訪れた。それは私にとって、一生忘れられない経験となった。

*

郭老――中国では尊敬すべき年輩の人物を敬愛の念をこめて「老」と呼ぶ。以下「郭老」と記す――の訪日記録を残したいというのは、私の宿願であったが、果たせないまま何年もたってしまった。

一九七八年六月十日、私は日本での十五年間の記者生活を終えて帰国したが、北京に着いて二日たったばかりのとき、思いもかけず、郭老の訃報に接したのであった。その瞬間、三年前の七五年の夏のことが頭をかすめた。そのとき、休暇のため一時帰国していた私は、郭老の秘書・王廷芳氏の好意で、北京医院に入院されている郭老を見舞うことができたのだ。

郭老はソファに座り、優しい目を病室に入っていくわたしに向け、手を出してくださった。私はその手を両手で握りしめた。老はかなり憔悴していた。私が見舞いの挨拶をすると、郭老は優しく私の近況を尋ねた。長男が当時日本の中学校に入っていることを知ると、老は、外国語を習うのは環境が大事で、小さい頃から日本で日本語を習うのは一番いい方法だといわれた。郭老の思いやりと励ましに感謝し、長くはお邪魔できないので、名残り惜しくいとまを告げた。病室を出る前、ふりかえると、郭老はちょっと右手をあげ、見送ってくださった。あのときの姿は、今でも目に焼きついている。

これが永の別れになろうとは思いもよらなかった。その日のことを思い出すと、胸がつまり、果たすべきことを果たさないでいるという負い目を強く感じたのであった。

いうまでもなく、郭沫若氏は中国の優れた詩人・小説家・戯曲家であり、そして著名な歴史学者・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

考古学者・古文字学者であるとともに、内外に名をはせた政治家、社会活動家でもあった。深い思想、豊かな学識と才能をもつ郭老の訪日の活動を書くのは、私には荷が重すぎる。それなのに敢えて書こうと決心したのは、自分が数多くない関係者の一人だと思うからである。

当時、私は通訳として郭老と「影の形に従うが如し」の三週間余りをすごした。あれから三十年余りの歳月を経て、代表団のメンバーは何人も相次いでこの世を去った。もうこれ以上時間を無駄にはできない、自分が知っていることを早く書かなければならないと考えた。

郭老の逝去後、新聞などで老を偲ぶ文章をよく目にしたが、郭老の訪日についてはあまり書かれていない。この数年、郭老が訪日したときの詩が新聞に発表され、また何種類かの「郭沫若年譜」も出版された。さらに郭沫若についての研究論文も多く発表されている。これは喜ばしいことで、これからの郭沫若研究に役立つにちがいない。しかし郭老の訪日についての部分では、事実に合致しないことや検討を要することもある。これらのことも、私にペンをとらせる原因のひとつとなった。

もとより、私の郭老への理解は浅く、見識も狭く、誤りもあろうかと思うが、できるかぎり客観的に、正確であることを期したつもりである。

*

この数年間、当時の資料収集につとめたが、熱心にご協力くださった日本の友人も少なくない。北九州市若松区の外科医柏木正一氏は、保存してこられた新聞の切り抜きと資料を提供してくださったが、その手紙には、これらの資料を「私の手元に眠らせてしまうことはよくない。劉先生の手によって、日中友好のために、また偉大な郭沫若先生の日中国交回復のご功績を歴史に留めるために利用していただくのが最もいいと考えます」と書かれていた。また日中友好事業の先達、島田政雄氏も、保

存されていた多くの資料をコピーして送ってくださった。

この本では郭老が訪日の際に行なった挨拶や講演をできるだけ多く引用した。郭老の挨拶と講演は当時の特定の事情や中国が直面していた国際情勢と切り離せないものである。一九五五年は、中華人民共和国が成立してからまだ六年しかたっていない。当時中国はまだ帝国主義によって封鎖されている状態で、中日両国の戦争状態もまだ終わっていなかった。中国の社会主義建設はまだ始まったばかりで、社会主義革命と建設の道筋に対する認識も完全ではなかったし、さらに一層の努力が必要とされていた。こんな背景のもとで、実際にそぐわない目標やアピールを持ち出されていたことは否めない。これを現在の標準で測ることはできず、当時の歴史条件から理解しなければならないと思う。だから、本書では郭老の発言記録原文を尊重し「加工」を行なっていない。

中日関係は今日すでに新しい段階に入っており、郭老が訪日した当時とは比べものにならない。この中日友好関係を末長く、より一層発展させ、二十一世紀が中日友好の世紀になるよう、私たちは努力しなければならないと思う。また、中日友好の伝統を代々伝えていくため、正しい歴史を青年たちに伝えなくてはならないが、この本が若い世代に少しでも役に立てばと願っている。

この本が、中日両国人民の友好と相互理解を深めるために役立てば幸いである。

中日両国は一衣帯水で、二千年余りの友好の歴史があり、また多くの共通点を持っている。これは中日の友好を発展させていくために、きわめて良い条件である。しかし、中日両国は社会体制が異なるし、歴史と伝統もそれぞれ独自のものを持っている。違いがあるのはいうまでもない。だからこそ、さらに両国人民の相互理解を深める必要がある。

この本の中国語版出版にさいしては、遼寧人民出版社の陳連守氏はじめ各位には絶大な尽力を賜っ

た。彼らの励ましがなければ、恐らくこの本の出版はできなかったであろう。心から感謝したい。

また、ここでとくにサイマル出版会の田村勝夫社長について記させていただく。田村氏は日本の著名な出版人であり、世界史的な視野で数多くの書物を世に問うておられる。氏は中日国交回復二十周年と郭沫若生誕百周年を記念して、この本の日本語版の出版を決められた。著者としては心からうれしく光栄に思う。

また、訳者の村山氏は私の大先輩で、「専家」として北京の「人民中国」雑誌社で何年も私と一緒に仕事をしたことがある。その訳は流暢で正確だし、とくに古典の翻訳に長じている。この本の翻訳をお願いできたのは、本当に言うことなしである。ここで、田村氏と村山氏のご好意に深く感謝する次第である。

この本が今後の中日友好事業の発展に役立つことを心から願いつつ。

（一九九二年夏、北京にて）

劉　徳　有

1

十八年後、われ重ねて来る

――戦前、戦中、そして戦後の日本

遠まわりの道

時間とは不思議なものである。多くのことが時間の経過とともに忘却の彼方に消えていくが、逆に時間がたつにつれて、かえって新鮮さを増し、記憶のなかに浮かび上がってくるものもある。

私がそう思うのも偶然ではない。一九五五年十二月、郭沫若老が日本学術会議の招請に応じて日本を訪問した。私は通訳として随行し、三週間の忘れられない日々を過ごした。この訪問が私に残してくれた印象はすばらしく、深く心に刻みこまれている。いま、郭老のことを偲び、机に向かう。あたかも三十数年前に戻ったようだ……。

それは一九五五年十一月のことである。ある日の午後、私は突然、郭老の通訳として日本へ行けという命令を受けた。当時、私の勤め先は外文出版社の「人民中国」編集局日本語翻訳部であった。ここでは中国語の記事を日本文に翻訳する仕事を担当していたが、ときどき他の部門に呼ばれて、日本からの代表団の通訳を担当したり、中国代表団と一緒に日本へ行ったりしていたのである。

郭老の通訳として日本へ行くことは大きな喜びだったが、同時に、少なからぬ緊張と不安に包まれた。というのは、私は以前、日本の代表団が来訪したとき郭老の通訳をしたことがあったし、また他の人が郭老の通訳をしたときのようすを見聞したこともある。

郭老の通訳に対する要求は厳しい。郭老は学識豊かであり、また日本語も堪能である。その前で通訳するのは、小学校の生徒が試験を受けているのと同じだ。訳が正確でなかったり、つまったりすると、その場で直されたり、補われたりする。郭老が日本語のある表現を想定して話した中国語を十分理解していなかったため、他の言い方で訳したこともあり、郭老が直してくれたのを聞き、やっとなるほどと分かったものだ。こんな例はとても多かった。郭老について日本を訪れるのは、得がたい勉強の機会にちがいない。

出発前のある日の午前、代表団全員が北京飯店で打合わせをした。私が早めに行って待っていると、学者らしい風貌の何人かが現われた。知らない人ばかりだが、代表団のメンバーらしかった。やがて、郭老がこられた。質素な服装で、耳にお馴染みの補聴器がついている。

会議が始まり、一人ひとりの団員紹介があって、やっと彼らの身分が分かった。

馮乃超　広州中山大学副学長
翦伯贊　中国科学院哲学社会科学部委員、北京大学教授・歴史学部部長
蘇步青　中国科学院物理学数学化学部委員、上海復旦大学教授
茅以昇　鉄道研究所所長、中国科学院技術科学部副主任
汪胡楨　水利部設計院技師長、中国科学院技術科学部委員
馮徳培　中国科学院生理生化学研究所所長、中国科学院生物学部委員

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

薛　愚　北京医学院薬学学部部長・教授
葛庭燧　中国科学院金属研究所研究員
尹　達　中国科学院考古研究所副所長

郭老は席上、団員をもう一人増やしたいといい、熊復氏（中国科学院歴史研究所第三研究所研究員）も加わることになった。

以上のメンバーから見ても分かるように、代表団の構成は、教育、歴史、数学、橋梁工学、水利工学、生理学、薬学、物理、考古などの分野が含まれている。彼らは新中国科学界の代表的な存在である。これだけの代表団を送るのは、中国が中日の文化・科学の交流を重要視し、中日両国の友好関係の発展を求めるという願いを表わすのに十分だと感じた。

当時、中日両国の関係はまだ正常化しておらず、戦争状態は終わっていない。飛行機が直接飛ぶことなど思いもよらず、日本へ行くには香港を経由しなければならなかった。

十一月下旬のある日、私たちは北京から飛行機でまず広州に行った。私は訪日の手続きをするため一足早く香港に入った。郭老はじめ代表団一行は、数日遅れて九竜に着いたが、香港島に渡らなかった。香港の空港――啓徳国際空港は香港島ではなく、九竜にあるからである。もし香港島に泊まるとすれば、九竜まで連絡船で往復しなければならない。郭老と一行の安全上、それを避けたのである。そこまで考えなければならなかったとは、いまでは思いも及ばないことであろう。

代表団を迎えて、私も香港島から九竜に移った。

その夜、九竜の宿舎で、老は、日本へ到着したときに予定している団長挨拶の日本語訳を見せてほしいと私に言った。私は、北京であらかじめ原稿を渡され訳しておいたのである。当時、私は二十四

歳で、万事にうとく、翻訳の経験も浅かった。訳文の質が高くないことはいうまでもない。

郭老は丹念に目を通したのち、言葉づかいに重みがないところが何カ所かあると指摘し、いちいち適切な訳語を示してくれた。通訳するときは、ただわかりやすくするだけでなく、話す人の身分、地位、経歴、年齢などを考えなければならないとつくづく感じた。日本語に訳した郭老の挨拶は、中学生の作文ではなく、老の地位、立場に合うものでなければならないのだ。

郭老の教えは、大変勉強になった。惜しいことに郭老が自ら直してくださった原稿は、残念ながら、その後紛失してしまった。

十一月三十日の午後、私たちはカナダ航空の飛行機に乗りこみ、日本に向かった。だが思いがけないことに、出発して三十分後、飛行機のエンジンが故障し、また九竜に戻ったのだった。翌十二月一日、私たちはあらためて英国航空（BOAC）の便で出発した。

およそ六時間余り飛んで、夜になった。やがて、美しい夜景が見えてきた。東京である。七時三十分、飛行機は羽田空港に安着した。郭老にとっては戦後初めて、しかも十八年ぶりの日本である。そして、中国科学代表団としては初の日本の訪問である。

着陸後、飛行機の窓から見ると、飛行場には数人の人影が見えるだけで、歓迎陣らしいようすはない。郭老はこれを見て、さりげなく私に言った。「歓迎陣はいないようだ。挨拶のなかの〝盛大な歓迎を受け〟の〝盛大〟の二字を削除しなければいけないな」

あとでわかったのだが、空港の新しい決まりで、歓迎の人びとは、代表のほかは飛行機のそばにくることができず、ターミナルで待っていたのだ。

飛行機を降りると、タラップの下で、長身の茅誠司氏と白髪の東京大学元総長の南原繁氏が寒風の

なかに出迎えてくれた。私は二人の腕に飛行場の通行を許可する腕章が付いていることに気づいた。

「ようこそ、よくいらっしゃいました」

二人の先生は招請団体――日本学術会議を代表して、私たち一人ひとりと温かい握手を交わした。

ターミナルビルに入ると、歓迎の人の群れであった。手を振ってくれる人もいれば、うれしそうに声をかけてくれる人もいる。空港まで郭老と代表団を出迎えに来てくれたのは、約四百人に上った。日本の学術界、文化芸術界、教育界、政界、貿易界、日中友好団体、労働界など各方面の人びとで、わざわざ地方から来た人もいる。

新中国成立後六年たったばかり、しかも中日関係が正常化していない当時では、この歓迎ぶりは最高の民間外交であった。団長挨拶のなかの「盛大」の二字を削除する必要がないと知って、私は胸が熱くなった。この夜、日本の友人のほか、在日朝鮮人総連合会、ソ連在東京代表団の代表、および在日華僑代表も出迎えに来てくれた。

郭老は空港で、日本の団体と華僑代表から多くの花束を贈られた。大きな拍手のなかで、茅誠司氏が歓迎の挨拶をした。

つづいて、郭老が挨拶した。低くおさえた声だったが、感情のこもった挨拶であった。

老はまず盛大な歓迎に感謝し、中華人民共和国訪日科学代表団が日本学術会議の招請に応じて友好訪問と学術の視察ができることを喜び、それは日本人民に対して、中国人民の友誼を表わす機会ができたからであるといったあと、「私個人にとって、日本は前後二十年も滞在した第二の故郷である」として、近年、中日両国人民の友好的な往来が増えてきたことを歓迎し、二千年あまりの友好関係をもつ両国人民の根本の利益からみても、両国の経済、文化などの分野の往来をさらに発展させなけれ

ばならないし、また両国の外交も早く正常化しなければならないと強調した。そして、そうすることこそ、アジアと世界の平和を守る責任を担うものだと述べた。

そして郭老は、今回の訪問が両国学術界と両国人民の間の友情を一層深めるように希望していると いって挨拶を終えた。

この挨拶は、途中何回も大きな拍手で中断したほどであった。

一行の宿舎は東京の帝国ホテルであった。郭老はそこで十八年ぶりの日本の最初の一晩を過ごしたのである。

「訪日は早すぎませんか」

東京の帝国ホテルは日比谷公園に向かいあっており、褐色の煉瓦を用い、欧州の古城を思わせる重厚な設計で、日本でも特別な建物とされている。

帝国ホテルを宿舎にあてたのは、日本側が代表団を貴賓並みに待遇している表われであった。二階の奥に客間一つと寝室二つからなる特別室があり、奥の部屋に郭老が、そして外の寝室に私が泊まることになった。郭老の日常生活の世話と、来客があるとき通訳するのに都合がいいからである。

翌朝、ホテルの従業員が朝刊を各部屋のドアの下から差し入れた。私たちは当然、日本の新聞がどのように代表団の動向を報道しているかに関心を持っていた。比較的大きなスペースと写真で代表団

来日を報道した商業紙は朝日新聞だけであった。他の新聞も扱ってはいたが、やや小さく、そこには政治的配慮が感じられた。(訳1)

この感じは理由のないものではなく、事実、当時の中日関係を反映していたのだ。日本政府は中華人民共和国が唯一の合法的な政府だということを承認しておらず、日本のマスコミは中国を「中共」と呼び、滑稽なことに「中国の五星紅旗」を「中共の五星紅旗」と呼んでいた。日本国内の反中国的な一部の人たちは、世界の反中国・反共的な勢力と同様、新しい中国を敵視していた。彼らが郭老の訪日をこころよく思わず、新中国の影響が拡大することを恐れるのは当然であった。日本のマスコミにも、こうした雰囲気が反映していたのである。

当時、アメリカ政府は日本政府に対「中共」の基本的方針を打ち出すように要求していた。毎日新聞十二月十一日の社説は、これについて論評している。すなわち、日本と中国大陸の関係は「歴史的にも文化的にも密接であり」、中国国内の情勢の安定と国際情勢の変化に従って、日中関係を調整すべきである。しかしながら、それは「容共を意味するものではない」とし、日中関係の発展には「限界がある」ことを強調していた。

郭老が新聞を読んでいるところへ来客があった。池田幸子さんという中年の女性とその娘の巴子さんである。池田女史は、郭老の古い友人で、抗日戦争期間、重慶でともに仕事をし、苦難をともにしたのである。十八年ぶりに、二人は日本で再会し、懐かしさで胸がいっぱいのようすであった。

池田幸子女史について、簡単に紹介させてもらう。それは三十年前のことであるが、夫君の鹿地亘氏は日本の進歩的な作家で、軍国日本の政策に反対して逮捕され、一九三五年十一月に釈放されたが、なおつづく圧迫を逃れて、翌年の一月末に上海に渡った。中国文芸界の進歩的な人士が面倒を見たが、

鹿地夫妻は上海でも日本の憲兵と国民党の警察に脅かされたので、やむをえずフランス租界に逃れていた。鹿地夫妻は宋慶齢女史に頼んで、彼らを受け入れるよう国民党政府に交渉してもらったが、成功しなかった。

やがて一九三七年七月七日、蘆溝橋事変が起き、つづいて八月十三日、いわゆる「上海事変」が起きた。鹿地夫妻は九竜に逃げた。九竜で、夏衍氏が「日本帝国主義の侵略戦争に反対する」という内容の文章を書いてくれるように鹿地氏に頼み、この文章は三八年一月、武漢で発行された新華日報に発表された。

日本人が書いた反戦の文章なので、大きな反響を呼んだ。当時は、国共合作が行なわれており、国民政府軍事委員会のなかに政治部があって、国民党の陳誠氏が部長、そして共産党の周恩来氏が副部長の一人であった。郭沫若氏は政治部第三庁の庁長として、抗戦のための政治・文化面の宣伝の任務に当たっていた。胡愈之氏、范寿康氏、杜国庠氏、馮乃超氏なども、この第三庁の仕事に参加していた。郭老は第三庁の仕事が始まるとすぐ、鹿地夫妻を陳誠氏に推薦した。

鹿地夫妻は、三八年三月に九竜から武漢に着いた。やがて、日本軍の侵入に伴って武漢から撤退し、長沙を経て重慶に入った。それから四五年、日本帝国主義が降伏するまで、夫妻はずっと郭老や馮乃超氏と一緒に仕事をし、深い友情を結んだのである。

鹿地夫妻は侵略戦争に反対するため多くの仕事をした。鹿地氏はまた、桂林、重慶などで日本人民反戦同盟を作り、日本の捕虜を組織して、前線の日本軍に反戦宣伝を行なった。

池田女史は懐かしそうに郭老を見て、「先生は全然変わっていませんね」と言った。

「もう年だよ」と郭老は言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.